

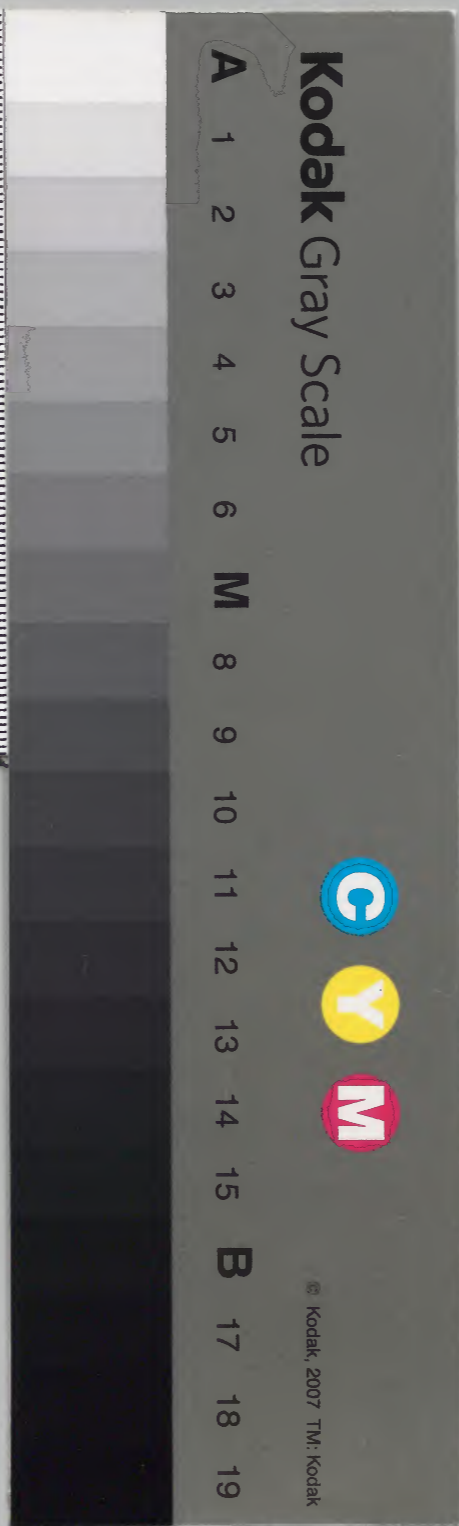
秘本玉之巻

上

庫文閣内				和書類	第 二 冊	共
八二函	一	二架	八〇七			

庫文官政太				和書門	第 二 冊
二	一	三架	八〇七		

内閣文庫		
番 號	和	8087
冊 數	2 (1)	
函 號	182	471



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり
 原本の文字など不明瞭な箇所があり

第^ニくもあやに^{アキツカミ}う^{キミ}古^ニ来^ル神^ニ吾^ニた^ラ此^ニ神^ニる^事
神^ニ漏^レ此^ニ言^ハる^事此^ニ神^ニた^ラ字^ニさ^ラた^ラ原^ニに^シ神^ニ集^ル
た^ラ此^ニ神^ニ議^シた^ラ此^ニ子^ニ天^ニ地^ニ依^ルお^シ極^ニ事^ニも^ト
と^{カキハ}望^ム石^ハ尔^カ為^ル盤^ニ尔^カ動^ク未^シ久^シた^ラめ^ニ尚^ホ未^シあ^ラし
お^シ保^ルも^ト政^ニの^カお^シん^ハ計^ニ字^ニ古^ニ来^ル大^ニ法^ニ集^ル等^ニに^シあ^ラて^シん
を^シ右^ニの^カ目^ニし^テ此^ニ大^ニ法^ニ代^ニの^カお^シむ^カ而^シ勢^ニ字^ニ深^ニく^シお^シむ^カ
未^シく^シあ^ラる^事も^トま^テ奉^ル居^ル此^ニ大^ニ人^ニの^カか^キま^シ以^テ侍^ル事^ニ付^ク

此^ニ此^ニ書^ニを^シ母^ニ即^ニ中^ニの^カ法^ニの^カぬ^ル事^ニ也^ニう^シ形^ニま^シを^シお^シこ
新^ニ比^ニ昔^ニより^シ年^ニに^シあ^ラる^事も^ト義^ニ也^ニう^シ此^ニあ^ラる^事廣^ニ田^ニ此^ニ
第^ニ留^ルの^カ比^ニ尔^ニを^シた^ラう^シあ^ラる^事也^ニう^シ此^ニあ^ラる^事廣^ニ田^ニ此^ニ
書^ニ人^ニを^シ此^ニ業^ニ之^ニの^カあ^ラる^事也^ニう^シ此^ニあ^ラる^事廣^ニ田^ニ此^ニ
此^ニの^カあ^ラる^事も^トた^ラふ^事に^シあ^ラる^事も^トあ^ラる^事也^ニう^シ此^ニあ^ラる^事廣^ニ田^ニ此^ニ
う^シ久^シ未^シ礼^ニお^シま^シけ^テあ^ラる^事も^トあ^ラる^事也^ニう^シ此^ニあ^ラる^事廣^ニ田^ニ此^ニ
久^シ仕^テあ^ラる^事も^ト礼^ニお^シま^シけ^テあ^ラる^事も^トあ^ラる^事也^ニう^シ此^ニあ^ラる^事廣^ニ田^ニ此^ニ

あつたふりての社しする及びはるもたわす
ませはるはるまはるほめたるるあつたに
いふ事からる事をもはるまはるもたわす
あつたに現るる地いかにてあつたはる大
あつた天照大神神珠の大法子現神吾大
依^{ヨサ}たるあつた大法及乎はるあつたはる
ふらふもそ大法神に現^{ミツナハシ}天^{オホキミ}皇^{オホホシ}に現る

めたる大法及乎もそ^{イトカシコ}はるもたわす
はるにたつたはるあつたはるあつたはる
はるもそあつたはるあつたはるあつたはる
あつたはるあつたはるあつたはるあつたはる
はるかあつたはるあつたはるあつたはる
あつたはるあつたはるあつたはるあつたはる
あつたはるあつたはるあつたはるあつたはる
あつたはるあつたはるあつたはるあつたはる
あつたはるあつたはるあつたはるあつたはる
あつたはるあつたはるあつたはるあつたはる
あつたはるあつたはるあつたはるあつたはる

おめくこ子あかり此世の世をわらうへなる者
諸事先をわらうこらるる女孫也
あねの
こしつたなきれこ

嘉永四年乙未年七月廿一日

座摩宮社務

従五位上渡邊近江守都下朝五波真政

秘本玉くーけ上

本居宣長著

身にたむぬあつらえさも玉匣

あけてふにみよ中のこころを

あらぬき下残の老の御政のすちなとをかりうめ
もとやうくやむことはいともいともたふけなく
れ多きぬるなれともとにうくに御武運長久御領内上
下安静ならむことを恐れなうら明くれ祈りまらむ
らとあらもやかくあらもやと必ふまとものはまきと
ころよ君 君御仁極深くまーまーては友ありうたき

○秘本玉くーけ上

又百代作おされ難又勅命の事もこれあらハ備玄なく
中おへしとの位を兼たる事付てハいよいよつねつ
ぬかり等る心の内のうたはしをも中し取さまほしく
て下残の身分をわすれ恐れをもへりみす尚時うけ
終えり及ふ伏玉の孫子たをうれこれ引おて殺心のほ
とをつくらもはるさらすは一去中述侍る人然れと
も様此れあるへき事とならハ 御後二使へられんこ
とハともくも死侍へ玉はん人の心とまうせ等るん
さて又家系こととき若の中更百子に一つも死用ひさせ
玉はんことなとハ思ひもつけ等らすたたたれをくハる

りに一たび 御目にふれさせられて御答たになく
も僕う大幸之也又言貴の御方へ御後二も後ふへき出
た重詞を口上に申上外類にも出へきなれ共左様にて
も却て恐れもあるへきまたた同輩とちの物語の心
持の詞を以て出つつり惣侍の文もうさるることなくた
た遺俗の平治を以て申す之是又悪意のほとをたしを
うらせたをしまして何事も御後しゆるされむ可をこ
ひおひ等るなりあなうしこ
凡て天下を治め一玉一郡を治むる政道大小のこと
つきてそ暑熱利害の料等を立るとまつ学問せさる人

○秘本玉く事上

の料管ハ多くハた今日眼前の手進き其のうへも
リよつきて工夫をめぐらして根本の取よハ公のつ
ぬまはしたとひ又其本の取へハつきてもその工
夫の至らざること多し殊に近來の世の風儀ハた
最の換好の事のみを計りて根本の取を忍ひていふ料
管をハ今日の用よたすまむり遠き事としてとりあ
せぬならひとなれるこれ大なるひやこと之今日眼前
の利益を忍むたまつて根本より正さずハあるへうら
ず其を正さぬしてはいややう工夫をめぐらしてよ
き料管を立るといへば後よへも由る飯上の縄をたふ

といふものよて末とくることなく皆いたつらむとな
り或ハついで大害を引おることもあるもの之れハ
さしあたりていまハリとほく迂遠なるやうなりとも
とにうくよ根本の取よ眼をつけて其の料管を立へ
きよさて又少少学問よたつさえる人の料管ハ多くハ
たたに去五種なと種虫の板を以て今日の政事よ種さ
むと此これハ根本の取よハ近けれとも種虫の板えう
リよてた時世のもやう其の風儀古今の变化なとよ
うときねよ今日の政事よたまことよ迂遠よして却て
世俗の料管よもねとる事もあるもの之れハ其体え

うの尚座の利益ののみハしる俗吏の料考よりハたさ
うとまさるへし又一等學問に依りて入て理の
ならん歴史を子なとをもえあつうひるの意味をも
ひ古今にひろくわたりて何事もよく多へ理の
もよく春込たる人の料考ハ本をも末をもよく照し考
へること相諱とあつそれとすえて俗人の及ひうたき
多しなは又せとあられたるほとんどの學者の理の
うけあるハいよいよ學問も厚く養われハ終さら宜し
きことと多き之をとも又いふはと學問よく理の
筋も鍛煉し尚世の事情も通達したるものとよく

儒者ハ儒者たるべきの一種の料考ありて後論のうへの
理を極むとせえても況んやこれを政変と用ひてハ
思ひの外よりよろしうらさる事もたはくして却て害あ
る事もあると熱して何事も実変と受けてハ後論理
屈の如くハいふやぬもの之又儒者ハうの聖人の意を
本とすることなくと政の根本の示ハとよりあくま
てよく忘れさるやうと必へた実をなほあらさる事あり
ぬこれこそ政の根本を極と必へる極もお達して実
の爲にハ叶えぬ事ありされハこそささうり後論のし
こくとりたこなふ座土の代代と久しく治平のつつけ

る二とハなし彼ハ学問をもよくしうしにき勢若と
ものせせよおて面而さまさまの上き料笈を立れとも
古へより今よ至るまでつひに治まり方宜しくして至
政のムく行えられたることなしをありさまを考るよ
まつ衆の人の立たる料笈よつきてそ通りを行ひここ
るむるよ必ひの外宜しくらさるよよりてそハいうと
と必ふ不へ枝の人のおて衆の人の料笈の非なること
をいへえけよもと必ひあたるねよ又そ料笈よつきて
行ふよそれも又よろしうらす又その非をいひたてて
又夥しき料笈をたていつまでもうくのぬくよてひた

もの度度改め変るほとによき事ハお来返して却て改
むる度ことよ害多くるの事よハ哀曲なる若も多くお
てさまさまと必政をなふりものよして後よハ必を七
すよ至れりさて右のぬくいろいろと改め改めて代代
を經たるあひたよハ志えらくハ久しくつつきて世を
よりえてもそ仕方ことよ宜しとたもたるる事もあ
れたそれよまた重うたを扱よ行ひえり時ハ必ふやう
よもあらんして改むるなりすへて儒者のくせとして
先代の誠ひたる所以を論してうくのぬくなりし故よ
そ至えはろひたれえけ度ハ改めてうやうよせえ必長

久なるへしといふハ代代のつねのことと云はれたるの
弊と懲てこれを改めても又それも同じこととて久し
くハつづつ又後禱ハ為る聖人の乃聖人の乃とい
ひたつれともうの聖人の乃のままたも玉ハ治まり
うたき成る代代といろいろの形はをハまるとと云
して古より唐土の風俗として何事よりハ回きと依
ることとをハたつともはたた巴う私勢を以て考へて万
の事を改めうえて功を立んとするならえし之これた
た巴う才智を恃みてまことの乃を忘らさるもの之
まうの考へたることとの後禱理をハいふほとをて

的当したるやうにせえても実事となりてはうの後禱
の如くハハ行えれは必ひの外に失あるべきこと乃
理より改えさる所あるは能はるを以て方口て儒者
の料考ハひたすらの唐土の乃たを以てきり又ひて
もの事を己ら心して改め度んとするの儒者たき
の一種の料考と申すハ二ハ之儒者かとり唐土の治
められたるは乃しきやうにハえとすらの代代の治まり
ふり学考の後禱のやうにハいさるを以て玉実ハよ
りハハらばは之をさるとはしらの玉ハさえり
しにき登賢の考て学問もあつた考慧修き人た受け

○秘中むく一考上

六

世の中は玉なるものなれは左様は代々の治はりたる
悪くしてとり去らぬと云ふといふこと上は中せりぬ
く方の根を去りうはいすれ尤莫はこれ去らざる
うれ之を去る中の可いものなりしはたてて人の
智慧は使はれ及ひりたきものあるものなれはたやす
く形はを治ふへきことあらにすへての事たは時世の事
や治はるむらに先人の為来りたるうたを治りてこれ
を治むれはたとひ少少の弊はあてた大なる失はなき
もの之何事も久しく訓来りたる事ハ少少あしき不
ありても世人の安んずるもの之形は治むる事ハ上なき

西てもまつ人の安んせざるものなれはなるへきた
けハ四よりて改めざる事玉政の肝要之これ即ちこ
との為なるなへる子細ありうのわけハ別巻に委くい
へるうぬしきて又度土の治めたることハは方にてハ
いよいよなるうなひりたきわけありうやうといえハ
儒者の心より却てをうしく必ひて天地ハ一枚にて人
情ハいつくもいつくも同じけれハ度土日本とて是
二つハなく治めたるの根本よりえりハなき事之殊
度土ハ聖人の玉なれは事なるをたきて外よりを治め玉
を治むへき事ハあることなし聖人の為をたきて外

乃をいふものハみな吳端として正乃とあらはと儒者
ハいふへし能れとも是ハ一通り後も皆いふ事とてめ
つらしうらなほるのうへを今一暇言く考へてうの
聖人の乃ハなほ根本の所とたうひめてまことの乃
をなえさるところある事を探り求むへきとてうへの
後篇の美しきと惑ひて彼乃となつむへきとあらは殊
と本邦ハ吳とハ格別の志なあれハ別して正政を行
ふと乃の根本を志らなハあるへうらなこれらのわけ
も悉しく別卷とあり但し根本の所ころ遠ひたれ塵土
の乃とさえりりの聖人の智慧を以て遠立したるもの

なれハ末末の今日の行ハの節なとてハ我利ふへき
にほし本邦とて中古以来ハたほく漢族の政とて用
俗人をもなへて漢族と成ぬる世中なれハ今ハ末末の
事とハうの否の乃をもましへりてハいかなえぬやう
なることもあるとされハ吾君たる人ハ中流と及えな
うの政を執行ふ人も他分と漢学をも志てそ乃の宜
しき所をい変とよりて我利ひもすへく又うの否の代
代の治め方の実とハよろしうらさることをも考へ志
りて根本の所とてハ大と遠ひるといふことをよく
考へ快りてつめつめうの乃とてより熟ふへうらな

うへすうへすもは根本の所ろ大切なる大うたせ人す
へて得学をする者ハ必うの乃うたより熟ひて他あ
る事をおらねは根本の遠ひをえさとらさるねう即て
急政をもあやまること多きえはところをたうよく希
へ快りかう志めて勤うされハいうほど得籍を看て朝
夕これう刻居ても害ハなうるへしさて右のぬくなれ
ハうの大本の類をまつ筈卷のえしめう中へき事な
れともせう虫籍をもえるほとの人料勞ハ得うよる
となけれとれをつうらみな得換の料勞なるものうて
得換の料勞の外なることハ再う入うたきものなれ

ハ始めううの大本のわけを先つ中してハ志迂遠う少
えふ政う益なるいたつら事のぬく少也へけれハ省
む人たちまちう卷をすてて末をもえおふましきこと
をたうるるう故うこれをハ志をらく末へまえし別巻
として本出うハ手近き事たをのみ中へうの別巻ハ
先年述作せるところなるをば度お係へ侍るえさてふ
政ハ志変廣く多端なるものうて一一ハたやすく中し
つくしうたけれハは虫ハたた尚時さしあたりたる事
たをこれうれ換おていささう惡志を中へのみえさて
は虫ハうの末末の手近き事う至るまでも根本の志を

土臺として是より背りさるやうを詮とすれハ事より
てハ様より遠く至益の事又安也る所も多うへし
此れ此方の事のことの存理よりむきてハいふほど
又安也るともこれを引ひ見る時より其の思ひしめく
ハ引たれぬものよりてうへりて傷害ある事もあり又尚
かハ利益あるやうでも必末とほりうたきもの之又
根本の存理よりてたこなふときハまより遠きぬく
却て思ひの外より速く其禍ありてよく引えらる事あり
或ハ尚分ハるの志るしみえされともつひよりその後あ
らえれて永久より引えれ或ハ同じ又えてハ志るしなき

やうでも同じ又えぬ所より大なる益ある事なともあ
るなりされハ打安たるところは遠なれハとてこれを
引らさるハうしこきやうなれた却て悪なることと
へすうへすも存の大本の所を土臺として末末の細変
までもこれより背りさるやうを詮として何事をもとり
引ふへきことなり

衆体上中下の人人の身分の持やう各うの分際にお
のよきほどあるへきハ勿論なれとも其分際分際一つ
きていふほどなるうねのあたりまへといふ事ハた
しうなる事なけれハ其ハ定めらたきことなれとも

○秘本おく事止

古今の言をあまなく考へてこれを案するに今の
世の人人の身分の格別ハ上中下共ニたしなへて分際
よりハ殊の外重ききと過たりまつ上をいへハ今の
大名方の所身分の重ききハ上古の天子中古の大將
軍などの格別子よりもまさりて万々重ききとされ
し准して中下の人人もみな同じりてたと一ハ今の
世に手取もとる武士ハ昔一万石乃至四万石も死し
人ほととの重ききさへ百石とる人ハむろし手取も
石もとりしほとの人と同じくのことく上中下たし
なへて身取殊の外に重ききとされし准して分際

不におよぶ公持も重きき身分の格別にて昔ハ大名の自分
にせし程の働きをも今ハ百石も千石位迄の人も皆
下なる者云付働かせて自分ハせぬもの格別なれり
富める町人ハ格別の事と認めれば天下一同の事な
る故に各分際と過たりと云ふをみつゝらも覚えに元
より簡便に互へき善の物とのみ公持活る之身分を重
重とするハ奢りとは別の事の格別なれば是即大なる奢
り之中ハ平人の奢りハ身一分持りの事のみにて
其害の代り及ぶ事ハなきを上たる人の奢りハ其害無
内り及ぶ之趣体治平の代りしく後々時ハいつとな

く世に物も兼受て成て漸漸一人の身持も重なる
可なるを時時と是を押しすして捨置時八年年月日
長しゆて際限なく次第次第と世に困窮し及ひて竟
如何なるの起る之既に近來徳大名の家柄は是らす
多くハ此様子大に逼迫するハ全く此様之昔ハ徳大名
何れも年年と大さうなる軍役松を勤められし時すら
今の如く逼迫する事ハ安して費りたりし今の世ハ
竟て軍役松ハ勤め玉ふ事もなく知行の抽成ハ新田松
も出来て多く二つなりつれ昔より減したる事ハなき
と却て此様子の云逼迫するハいふなる事や全く是

世に次第と兼受て成て漸漸一人の身持も重なる
可なるを時時と是を押しすして捨置時八年年月日
長しゆて際限なく次第次第と世に困窮し及ひて竟
如何なるの起る之既に近來徳大名の家柄は是らす
多くハ此様子大に逼迫するハ全く此様之昔ハ徳大名
何れも年年と大さうなる軍役松を勤められし時すら
今の如く逼迫する事ハ安して費りたりし今の世ハ
竟て軍役松ハ勤め玉ふ事もなく知行の抽成ハ新田松
も出来て多く二つなりつれ昔より減したる事ハなき
と却て此様子の云逼迫するハいふなる事や全く是

○秘本玉く上

たかりにてハきのみ以勝手の直る程の事ハお來うた
うるへし是らの外に急なればとハ公の付さる事大に
度大の費ある事多し先以身分の重き者よりして夫に
つきたる万事を殊の外重き者先扱ふら武備軍政の
外に以身分の事より付たる換換の役人扱ふ多くして一人
よても味へき事よも上役下役既既よ直て人多くうら
りさしてもなき事よも多くの人手有るうり次第より
も整く費多くそ一一の取扱ひよ一つとして以物入の
なき事ハあらに又既既の役人多ければ換及へ扱物
入も多うるへし熱体上の事を下下よて先扱ふ事餘り

重き者お下の帳と成事ハ中よ及ハに益益の費も志
多き事なるを重おなる事大とハ上よハ公もつき
うたき事なるへしこの帳衣扱扱のぬきも上よめさ
るる事ハいう程員を尽してもたうの志れたる事なれ
たそれを下よて餘り重き者先扱ふよつきて役役扱も
多くひたすら念を入るをよき事とする習ひよて半年
月月に既事重き者なりて益益の事よ念を入るうら
何よ付ても費の志多きへすへての事を餘りよ大切よ
重き者する時ハ只益益の費益益の扱ひのみ多くして
却て志本志の実をハ失ひ表向斗りよなり廉末よ先扱

ふよりハ括句迄ニ劣る事も多く又却て手形の去恐き
事多し製へハ重く此前へ達してはよき事を後人の役
人の手を種うしこの役所へ伺ひ松彼はとすねえを
益の人を万うり残事の費松のみ互て却て急きの此
用の弁し松ハ滞りて何の益かなし万の事是は准して
知へし大うた今の世大名分の御身分のうへに付たる
後事の取扱ひを足るは十は六七ハみな劣きてもよき
事のみ之これ皆先規の定格のやうに思へともむうし
ハ熱体物事無造作として今の世のぬく重きしくハあ
らさりしねえ何事も物入ハ今の半分はもあらはして

却て手形も宜しうりしえさて軍記なとをよみてむり
しの大急の身分働きと今の振子とをくらへ見て今の
世の去にもたもしき事を考へ知へし主君の松るのみ
ならぬ取中までも皆厚とほとふ分際よりも殊の外重
重しくなれること上にも既よりせらるることしこれら
ハ我々の時代と治世とハ因しはよハいふへきとあら
されれ今の世のありさまハあまりに重きしきと過た
りたとへハ甲乙丙丁と上下股肢の役人互て事をとり
りふく若ハ甲うみつうらとりあつうひし事を今ハ
乙と云付てえ扱えせ先年ハ乙う勤めたりしわさを

を手に丙もつとめさすやうになり去年まで丙も
手つらつとめたるもいひしう今年少すつとめ
させて丙も手をたろさぬやうになりて熱伴下下まで
武士の身持次第も重々しく成りて付て八玉中の政変
のためにも宜しうらぬこと多きえ太のことく身を重
く持もつきて八玉のつうら家内の善しもよくなりて
身の勞ハすくなければ物ハ多ければ早業ハ面面の
ためにも換へさて又徳大名の江戸に往來の人殺殊の
外も多きこと今の大名の往來の人殺ハ全く軍陣
の人殺なり平者の往來もやうもたひたたしき人殺

をめし具せらるるもハ和洋古來も及えぬことにて
益の費はほりるへきも之但しこれハ昔し戦国より
るごうりし時代の所定めにて武備もあつうり 公侯
へううえりし所もにて今私に減少ハなりうたきわけ
も互へきうあらぬとも今の治平の所代の互振もとり
てハ大に減少し玉ひて二分の一くらゐよても宜しう
るへく思はるること之さて主人の人殺の多きに准し
て衆中の人人の差差の往來の人殺も多し一僕にて
も宜しうるへきほとの人も三人又人めしつれ三人又
人くらゐよて宜しうるへきをりも北人世人又十人も

○秘本おくし

めしつれらるるやうに人殺ハ多けれとも高きうの
時の用も立へき供まむりハなれなるへけれハこれ
皆互益の人殺してたた外兄の美美しきと途中才の用
るを自由と承する事の二つハ過はたとひ武後の
ためなるまむせよく静謐の用代は若くは往來
さえうり多くの人を引連はとも何のあやまちあら
ん早免たた才分をたもたもしくするうさりこのみな
ること之きてまた江戸浩の人殺も是又大抵
後の用定めあるうハ志らぬと斯治平の用代としてハ
云はほくして費はひたたしきことなるへし用領内の

政勢の筋ハみな承元にてとり移えらるる事なれハ江戸
用屋敷の用用としてハたた公儀の用つとめ方さてハ
用親方モ外の用むつひ兼用承元との掛引なとの
みよてモ條ハ大方みな用方方の用身分のうへに付た
る用用のみなるへけれハ必しも武後のためにもなら
はたた用身分の重きき方と付たる男女の人殺の云
多きなれ互益の用物入のたひたたしうるへき事
大うた右の事なると今の人ハ今の通りをあたりまへ
の用事と云ふへけれとも大に物らに虫をよみて若と
くらへ見て今ハ何事も大に過たることをさとりへき

○秘年むくき上

十七

之熱件大名の所分のあまりにもたもしきよつきて
所物入のたひたたしきハ勿備の事にて又これより
て玉政の妨となる事何よつけてもたほしるのわけハ
そ不不に下へし抑下民ハ定まれる禄なけれハ困窮
に及ぶ者多きも存続なるが武士ハ定まれる禄あれハ
争争取お座ささへくらさハ逼迫することハ至らしき
存続に大名方もをりをり凶吏水換なとありて所収納
の減する事もあれたこれらハ古へよりある事にて今
始りたることとあらされハ為る所の所手者ハなく
てうなをぬる又 公侯の所手付なとて過分の所物入

ある是も定まりたる事なれば為る所の手者も必しき
事なり又凶年なると所領内の民をハ随分丈夫に救ひ
玉ひて一人も飢死し玉らぬやうは元計ひ玉ふべきを
つ是も定まれる事之さて所軍用のたくたへハ中取
り及せぬ事すへてつねつね太の事其の手当を丈夫
にして其條のところにをえりて年々の所利御をより
なひ玉大人ハ格別の所逼迫ハある事しき存続なる
こと其の所手者とも行とときうたきのみならぬあまつ
さへ年々定まれる所よりなひさへお來うたき家家の
多き少いなる事や古へハ下民より上る物今の年

十七

實はくらふれハまいさきかなる事とまて色七時代
今のぬえ士の過地ハ本沙ハなぐ先氏を教公
本節ハ花季節と定きて四年立れハ本堂を言教ハ出
分ハ城をられ時母よりてお給なから免しおへる
約きてまきられし此の血手肉をまきおきてと月
身し之れも今ハ様時二年立を過本免しまふと
もなく本件ハ此秋相も古へまハ十倍せること
の是らさるハ悲情の多の極ハあまりまはれもし
く安政のよりまよとして地物入の過今まはれな
らばさて中々の武家の多く内訌因おするも又同じく

分取不おをよ身分重しく法多花美となりて物入多
き故之武士ハ村はくハ町人なとくらふれハ内内ハ
花美とハいえれぬうぬくなれともされもせつれて
村のつうら何事も花美となれる之武士素れハ金銀の
ほしきまよまのつうら雅美をわひ又至りて困窮
する時ハ村のつうら肝心の武佐をも頼ことありよく
よくお給へきまのつうれに付て忍ふに尚時任用の志け
くもなき家中亦ハ大小上下に分多く農作をさせ
流内娘人ハ女工をお精せられて宜しうへきまやそ
甲上様き人人ハ他分なるへきたけハ自牙御道をとり

○ 初巻のく
十六

て働き又自身ハさすうろれほど又たらく事も成
たきほとの人人も極分うけまたりて指圖を付未なし
て熱体多くつくりをせらるるやう又あらまほしき
こやう又するときハさし尚りてまつ内被用筋の助け
ともなるへく又武士の筋骨身体つよくなりて才一武
士の働きのためにも宜しうるへき之熱体武士ハつ
ねつね身をたもたもしく安佚し持ならひてハ身体柔
弱となりて肝心のたたらまきの時大に苦しむへきをな
れハつねつね是をむうけて筋骨を丈夫にあらせまほ
しきことと

近來百姓ハ殊に困窮の甚しき者のみ多しこれ二つ
の故あり一ハ地味へ上る年貢も多きうね二つ
ハ地上一同の套につれて百姓も木のつうら身分の木
こりもつきたるね三つ一つは地味へ上る年貢のた
なえた多きと中流子細ハまつ唐土の上古ハ十の一
といふを中分の宜しきほととしたるなれどもねハ
股股多くなりたり能れ九は方の今のことくは多くハ
あらねさて本朝ハ大宝のころ今の所定めを考ふる
北分の一ほとはあたりてたとへハ米北俵とる所にて
年貢ハわつらう一俵とて淋たるに似しこれハ

いささう不審なることありて別は僕も考へもあれと
たとひその考へのぬくとして十分の一は過さる
ことと其外は潤庸なと云物ありしやたれも何はと
の事にもあらぬ大宝のころうくのにとくなれは了れ
より以亦上古はなほなほすくなかりけん事思ひやる
へしさて中古より次第に今の制くつれて年貢なとも
金くろのうみの定めぬくはあらさりしうとも又
世れともさのみ過分なうたれる事なかりしは源平
の礼の後強念より法にことごとくお役地所といふ
のをたうるるをなかりては領主と地所と支方へ年

貢を上るゝなりては時より年貢よほと多くなれる
之領主といふはもとより土地を領し居たる京家の人
人之お役地所ハ武家へきて次第に武家の威勢つ
よくなりて是利のせの亦以上り候なりては領主へ
上へき年貢をも一向は皆地所へ押し候り大將軍の号
命もつたれぬやうになりては天下の大急小急面面公
まうせは地所を治め儀を攻をつとめとする候と
面面武威を盛んにし兵力を強くせんためは既人
数を多く扶持するうら年貢をも過分多く取らては
たらぬやうになりて年貢もよとせるとなりし之

大うたは我玉の時のもやうハ田畑の抽成の内わつう
ハ農民の命をつつけて飢え及をぬほとを百姓の途
の二して天孫ハ皆年貢と云れるくらゐの事なりしハ
云じき事ならぬやきて孝臣笑白の所せハ天下ニ玩
治まりて何事もは制定まりてみたりなる事ハ止めぬ
れハ年貢の分量ハ大抵もとの戦玉の時のもよて
さうへり減したる事もなりき次ハ東照神代祖命
の時も同じ事なりけ時を治平と改して軍変ハ止
むといへともうの戦玉の時のもやう年代を經て久し
く事ならひハ成ぬることなれハ依ハ天下の武士を減

少し玉ふへきやうもなけれハたとひいふほど
ましをして年貢も依ハ減し玉ふことハなりうたき
自給の勢なれハも今よて今よ玉れるハ今
の年貢ハ今の戦玉のころのよまなれハ至て多きこと
之終るハ今の武士ハ古への定め
の分量をも考へに次
才ハ多くなりぬるわけをも思
へにしてたた本より今
のぬくハ上るへきもつ
の物と心得てみたりハ百姓
を志へたけ苦しむる玉も
よろハ五ときくハいふな
る事やさて年貢ハ今の一
ほとよて減し古への代と
ても百姓富る者も有りハ
あらぬ貧しき者も五し

○秘本玉く事上

正

ともき時代ハ年貢いささうなりし故一一反り二反の
田畑を作れハ今のせよ一町の餘も作るほどの米を
たるれよ貧しき者も貧しきなりよ力を勞し心を勞す
るものハ少なりしよ今のせハ年貢多き故一古へ一
一反二反の田を作りて盡しほと米ハ一町も二町も
作らされハ家物となりうたきよよりてうれたけよ
力を勞し心を勞するものもあしきううへよあまつさへ心
味の米ハ多くハ上へ上げて自分ハた米ならぬ廉米
の物をのみ食して過すよこれを思へハ今のせの百姓
といふものハいともいともあえれよふひんなるもの

よさて今のせいつれの由もせよ仁陸御く木をしま
に飲まて太の子細をよく考へ希へ玉ひ百姓を不便
よ又百て年貢を半減よも改めまほしく思ふに志あ
りても是ハ変してうなひうときことよ其ハ我玉以
來諸大名の武士を木ひよよしく扶持せらるることた
のつうら定まりと成て久しく年代を經来りたるもの
るよ其武士を過分よ減せられてハ公侯の軍役も
勤まりうよ又あまたの武士の儀よ難美よ及たるる
ことよて是を減すること成うよけれハ年貢も今更係
よ減することハ變してなりうたき由よ之又百姓も年

代久しくなれ来りたる年貢の事なれハ今の定まりは
とハ必上るへきものものと云はれ居て是を過分と多
しとハ必をぬことなれハふひんならも年貢ハ定ま
りのとほりなるへき事なれやせめてハ太の子細を必
るて今の世の百姓ハ必身を勞する事も古よりハ志し
く年貢ハ大ニ若しむものろといふ事を物々わすれ
たに不便ニ必居て居来りたる定まりの年貢の上をい
ささうもまさぬやうにすこししてても百姓の辛苦のや
すまるへきやうにと云うけ玉ふへき事ハ太名の行要
なるへく下下の役人たちまでもは云うけを身一とし

て忠義を必えハ他分百姓をいたえるへき身を爲爲位
付らるへき所なりとこそさて今の世ハ百姓の方にも
年貢のすちハ正曲ならさることをもへてこれを免
れんと居る者もあることなれやそれとも畢竟ハ上より
のいたえりなくあしらひの悪さハ下よりも左振のう
まへをハする之上の所めくみたは得ととけハ下ハ速
く感し暮るものろうし能るに依ふの振子をうけ玉え
れハ上上も下下の役人も百姓をあしらふは露はとも
めくみいたえるかハなくして年貢ハ本より今の世の
定まりのめくおんへきものものと云はれ居るの定まり

の年貢の外もなほさまさまの事なを工夫しおして
たたひたすらもた上る事をつとめとしてあきたる事
なくたまたま君ハ仁心ありてこれを由るやうにせ
んと名ひ玉へとし下なる役人これを由るさへ或ハ下
なる役人仁心あれとも上よりこれを由るさへたた百
姓を苦しめも苦しむる所もありとやうけたまえる
亦も中せざるめく年貢ハ西来りたる定まりのほとハ
やむ事なれにそ通りなりたせめてハそうへをいささ
うもたまぬやうにころあらまほしきも近來ハ漸漸と
江戸のみよてかしも減らる事ハなく猶又さまさまの

うろり物なといふことさへ次第も多くなりそ外何の
つのと云て百姓手前よりおた物年年も多くなりゆく
れも百姓ハ困窮年年もつものり未をつもりつもりて終
に家産へ田地あるれハそ田地の年貢を村中へ負する
れも餘の百姓も又揺うたきやうふなり或ハ困窮もた
へり収てハ農業をすてて江戸大坂城下城下なとへう
つりて商人となる者も次第も多く子女多ければ一人
ハせんうたなく百姓を立さすれとも残りハた厚く町
人の方へ奉公しおしてつひも商人となりなとする程
よいつれの村よても百姓の寛ハ限限とすくなくなり

て田代あれ々中次身工素直にこれ工固ては度を立て
百姓の兄弟子たなとを外へおす可を厳しく禁せらる
る玉玉もあれともそれハ源を留して流れの末を清く
せんとせらるるぬくなる物なる故工その禁制も違ふく
工立ちく又今の世ハただ尚座の可をのみえうりて
始終の可を考へさるならひなれハさしあたりて工つ
そ年の上納た工とのへハ宜しき可工して百姓の痛
むをハうへり見れば百姓のためハちくちく止の大なる
工損失なることをも忍えぬ漸工農民の可とるへち
く可ハうへにうへにも歎うえしきことの至りなりさ

て二つ工百姓の可ハ右のことくくつろきなきうへ
工又町人などの世の可ニりを兄ならひて可のつうら
可ニりもつきたる故工いよいよ困窮甚しき之を町人
の索リ工くらふれハ百姓の可ニリハ何ほどの可工も
あらされた地俵くつろきなきうへなれハいささうの
可工ても痛み工ハなる工困窮の百姓の可分工て索な
といふほどの可ハとてもならぬ工となれた世工工つ
れて免えにあらは可ニりの付さる可多したとへハ衣
履なと昔ハもめんならてハ用ひさりし程の若も今ハ
可しなへて珍帯なとハ納税をも用ふるやう工なりむ

○秘本五く一巻上

うしハ葉筵ならてハおさりしほとこの屋も今ハ冬を
くやうとなり若ハる才ハ葉筵わらんつてありきし
者も今ハ傘をさし履をわくやうとなれりこれらハ准
して餘の多ハは教多くして物入多き也
百姓所人大勢は黨して強御濫放することハ昔ハ治平
の也ハたさたさうけ玉えり及たぬこと之近也とな
りても先年ハいとまれなる多なりしハ近年ハ亦
これ多てめつらしうらぬ多なれりこれ武士ハあつ
うらハ早業百姓所人のことなれハ何ほとこの多もあ
らハ小変なるハ似たれハ小変ハあらハ大切の多

といつれも困窮ハせまりてせん方なきよりたころと
ハいへとも詮する所上を恐れさるより起れり下民の
上をたそれさるハ乱のたてま容易ならさる多て
まつ才一ろの領主の私奪これハ過たるハなしされハ
たとひいささうの多もせよはすちあらハろの起る
ところの本を委細ハよくよく吟味して是れをたたし
下の非あらハその強本のともうらをたもく刑もあふ
へきハ勿論の多又上ハ非あらハろの非を行へる役人
を多く罰し玉ふへきハ抑はるの起るを考るハ後ハい
つれも下の非ハなくして皆上の非なるより起れり今

のせ百姓町人の心もあしくなりたりとハのへともよ
くよく揺うたきといたらされハはるハたこるもの
あられたとひ親さんとふふ若ありとても村村一致す
ることハうたく又塾堂若ありてこれをすすめあき
てもうやうの事を一同にひろうと合はるハもれや
すきものなれハ中中大抵の事にてハ一致ハ去うた
るへし終るに近年は事のふふ多きハ代玉の例を
ていよいよ百姓の心も動き又役人のええうらひも
よいよ派なること多く困窮も去しきうれに一致しや
すきなるへし終れたまた近來せ上りはる多きと付て

ハ何れの函も上りもつねつねそのむけにこたら
親しうたきやうのうねての防きもあることなれハ下
ハいよいよ一致しうたく親しうたきな程之上のうね
ての防きハ徳にへき事とあらされハいりやうとも後
しやすく表向にてとりえうらふ事なれハ仍ひやす
またたとひ下へ隠してえうらふ事も上ハもとより一
致なれハいりやうともなる事なるに下のりやうの事
を親さんとねるハ上へ隠して至て密書と談合すへき
事にて殊とせむひろけれハうならぬ中途にて漏れ取
れるへきな程なる事近年たやすく一致し固まりては

るの起りやすきハ早業これ人爲ハあらは上たる人
深く遠慮をめぐらさるへき之能りとしていふほと起ら
ぬやうのうねての防ぎ工夫をなはた末を防ぐをうり
てハ止つたるへしとくその固て起る本を盡さ
にハあるへうらねその本を盡はといふハ非理のえう
らひをやめて民をいたえる是たとひいふほと困窮
ハして止の上のえうらひとよろしけれハはすハ起る
ものハあはれ能るハ近年ハ二二もろしこも多き
よよりてめつらしうらぬ多くなりてまつ一旦静まれ
ハよき事としてさのみ此の味もくをせうらね張本

人を一兩人とらへて定まりのとはり刑は行へハその
むきよて此の上のえうらひをたしなみ改むるもせ
にせ百ふ例多けれハさのみ恥辱とも思えれぬやふの
ふもありとろさてその張本人といふものも近來ハた
た假しもうけたる者よて実の張本ハあらはその假
の者といふハうねてはすをたに始めよりお謝して
りよこれに張本人といふ者よたててはよ刑は行ハ
るへき覺悟よて定めたく故よこれを刑しても何の益
もなくあたら罷もなき民をころはハあはれむへき事
之上よもろりのものといふ事ハ志りなりた定法

の秘傳はく事上

た。こまはよきこととして休す。近來ハすへてうやう
の程爲至実の刑多きハあるまじき事。たとひ張
本人と名乗る者ありたよくよくその実否を叱咤し
て疑ハしくハ実の張本人の知るまでハすのよせもの
を刑すへき。よあらば学の根を分てもまことの張本を
尋ねへき。人さて又近來は強勁多き。よつきて其時の
上よりのあしらひもややきひしく成てもし手こさけ
れハ飛たれなとをも用ふる事。なれりこれよりて
下よりのうまへも又先年とハ可長して或ハ行強なと
をもち飛たれなとをも持おて其体のふるまひ次第。

増長なる振子之これいよいよ容易ならんはさわきよ
索して万一不意の変なとお承る。あらんも又たうり
さきものこまつハ言ハ百姓町人の事。てその飛子
亦を父とつけた。すれハ宜しく又たとひ去板。及ひ
ても武をなともする。むは我の法なとも志らぬ。若なれ
ハ早業ハ恐るる。ハたらぬ。事のやうなれとももし上
より毛換なくきひしくこれをふせ。ハ下よりもまた
いよいよ用換なく身命をすててうらる事。あらん。そ
時たとひ武士一人ハ百姓町人の三人。五人。つ。よ。尚る
ほととの働きありともつひ。よ。多勢。及ひかたうらん。

〇秘傳

もそりうたく又たとひいろやうの計略をめぐらし
て十分勝をとるた敵とするところみな自分の民なれ
ハ一人でもそこなふときハ早業ハ自分の換之又手
とあまれるとき近ぶなとより勢ありて人殺をおさ
れてハたとひ子速勢まりてもいよいよ恥辱の至り之
但しきしあたりてハ手こハさときハやむを以て少
少人を換してなりともまつ手く執むるやうにたから
えん可もとより能るへき事之又後來を恐れ志めんた
めにも一旦ハ武威を以てきひしく押へ勢むるも權及
之能れとも始終ハ武威をうりてハ押へたしは方

よりきひしくあせらふハ以後又うの方よりいよいよ
よきひしくうれと教ふるやうの道理なれハ之能れ
ハはるハとよく又よ子の因て執る本をつつしむる所
勇たるへしとすうかたもたすの事なす
今の近町人の素ハ殊と云しき事へて飲食衣履
りたしめ法乃位者おみな言貴の人のうへとさのみ
異ならん中よもすくれて富る者なとハ内内こまらな
ることのたこりハ大名よもたさ木とらん何事も
若美をつくしてあたらしくくらんてさて町人ハ殊と
定まれる階級のなきものにて先ハひら一まいなるう

由急上り上りの大小の雲泥ちりひてもとろく富たる若
のうへを足ならひふらやみでさしおなきものもろの
まねをして分不おねよむたけよくらさんとほるら
肉體ハ困窮する若お多き之或ハ上りの困窮を陸さんと
するうらひよい困窮つものり或ハ上りを持直さんた
め又急上り大利を博んと欲してあらぬ事よろり流を
ほろほろ若も多しさてろやうよ熱体殊の外よ木こり
長七たれたこれ天下一同の事なるも急上り地よなりて
妻といふやうよも足えに面面みつうらも木こり之と
いふ事を覺えに本よりやうよあるへきものやう

よ急上りする人々の中よたまたま急上りの長しぬる事
よむつきて物も質素をむくくるものもあれたせり並
をえつれてハ却て衰なるやうよ云なされ入よわろく
よえろるよよりてせんうたなく木のつうらせりよ志
たろふも多き故よこれも木こりをまぬろるる度能え
よ又時々儉約儉約といひたて省略ほる事たもあれた
或ハ省略ほましきをまつ省略し或ハ止めてもさの
み為よもならぬ事を止なとして熱体の急ハお整らに
又志えらく儉約を加へてもせりみな能るよあらされ
ハせりよつれて又いつのほとよろあるみて本のこと

○秘本云く事上
三十一

くとなりなとしてすへて變素よりへる事ハつ由ほと
なくて年年月月と世上海美のみなり也と不と
貧しき若も世上とつれてたのつゆ物入多く困窮
る若のみ多きとさて世方のたこり又つきてハあるも
たほく世のときハひともなりて金銀融通はれハさの
み困窮ハすましきやうなるものなれ左左振ハあら
以上中下たよ身分不お庭とたこりて内務ハ困窮なる
也と若もハ多くても買たる物のあためをほおささ
る若殊の外多く又借たる金銀を返さざる若たほき由
是と賣若貸若利をねることなりうたてて換をする事

たほく又世上の熱情のあか多けれ元百姓の若人とな
るも多くて若人の救済方と多き由也と手まへ手まへ
の一分の若言ハ多うらぬ若言少なくてハ後世となり
うたき由へと表ひて多くせんとすれハ掛換なとと多
くなりて又困窮又益るさて町人ハ内務ハ困窮しなう
らも百姓よりハ身を勞する事もすくなく又百姓より
ハ奢て世ほるもの由也と百姓ハこれをうらやみてと
うく町人となる事を教ふもの多しそれ故と若人ハ年
年と多くなりて友つふれ又なるえさて又世上の奢云
しき由也と奢のすちは用るもるもの物たひたた

○秘本玉くり

し又それより人の手万をつるやん可もたひたたしき之
たより人万の用をなほ一切の物ハ至平ハ皆地より生
する可なるうち中又安てなるはぬ物と益益のたこり
は用は物とあるをせ上のたこり長しぬれハその益益
のより多くの物を費はるその益益の物のためは田地山
林多くつるへて多用の物のおる妨となり又益益の
よきまさま人の手万入る多きなり多用の業をなほへ
き老もその益益のわさをなしてせをばるこれ天下の
手万の費又してその益益の物ハ土地をつるやんも同
しする能るよせ人ハ子細をわきまへてして何ことを

してなりとも人のはせよなる多多くあるはほけれハ
せ上のよきむひ整居之をせけるハひうす之平民の身
一分のうへよてハひうすも何わさをしてなりとも金
銀をねるもの多きり利なれともよよ立て民を治むる
人の身よとりてハ銀内たしならして利益あることな
らてハ換あるたたとへハ城下ハよきえふて商人ハ利
をねるもの多くても左左百姓のつまりとなりてハ本を
失ふて末を益ねる之れこれハ天下と一玉一玉との
差別ありたとへハ何よもせよせ上の益益の奪のため
し利る物を多くつくりおはふあらんよこれハ天下の

の秘評ふくし上

へよ非いへハ換なれともを玉とりてハ換上あら
はい久よとゆふも物を多く作りおいたけ米穀作
りおれりすくなければ其物の價をえて米穀ホをハ
れたけハ使玉より異れゆゑ其玉ハ換なし能れた
るのみしてその米穀をつくりおささるたけ天下の上
までハ換あるへホへてこれらハ限らば天下と一玉一
ふとの上よてその換のうなるも外も多しさて又交
易のためよ者人もなくてハかなたぬものよて者人の
多きほと玉のためよ民石のためよも自由ハよきも
のハ物れとも熱して自由のよきハよきほと換あり何

も自由よけれハ了れたけ物入多く不自由なれハ物
入ハすくなし能るよ今の老バ人ことよ我ホとらしと
よきものををのみ自由なるうへよも自由よろらんと
にるうら者人職人年月月よ便利よく自由なるもめ
つらしきものなとを考へおし作りおしてこれを賣ひ
ろむるゆゑよ年月月よよきもの自由なるものお來
て世上の人の物入ハ漸漸よ多くなることよすへて何
もも今までなければなくして是りぬるもあるをえて
ハ益々不自由よ免元又今までハ廉ねなる物よてこと
たれるもそれより美物おれハ廉ねなるハまわろく又

○秘本
秘本
上

まゐるれに次才次才も物も救救にほくなり毎歳
になりゆくこととくても物も一つも多くな
り毎美になれハそれたけを話も多く物入心勿論本は
きとこれみな世中の衰りの長けるよて早衰ハ困窮の
基となることとそさて又世万の困窮は付てハ富る者ハ
いよよますます富を重ねて大うた世上の金銀財宝
ハうにきゆるきよ富者の手よあつまることと之富める
者高の筋の法も工面よきもハ中流よ及たに金銀財宝
なるもよりにて何事もつけても手形よろしくて利を
得るものみなる也と云ふいやともを報ハ次才よふゆる

りなるを貸しき者ハ何事もみなそのうになれハいよ
いよ貸しくなるる理えさて世に困窮して不勝手なる
者人多けれハうの不勝手なる方ハ何事も手形あしき
うら賣者も買者も多く手形のよき方へつくれよ富者
ハいよいよ工面よきと又世に困窮し付てハ金銀を借
者多きたよ也たうなる者ハこれを貸て利を得るも多
きよ貸しき者ハ借りて利をおしていよいよ苦しむ
を借りて返さざる者も多けれたうれよ付てハ貸者ハ
又いろいろと劫奪して惨なるやうを考へてうしこく
立すたるれよ換をにる方ハまつ少なし熟して今の世

ハ大抵利を得る事ハ終て換ハしやれき時高なる
也又富者ハ既分金銀をへらさぬ分別を才一として
性なるうたつて換ハすまづハ減れる事ハすくなく
とこくくふゆる方木はきんさてうれも少し不迫り
なる方又執るときハ又万々みな右のうらへまはる
は福万の金銀も消やすき事又妻の雪のぬしされと
そ金銀も貧民へハ廻ハしてうれもまた皆富者の手
に入ると又富者若ハ一旦大に換をゆる事あれた土臺
う丈夫なれハ又取返ハすもやすき事貧しき若ハ換を
しても再び取らへハへきたぬなけれハ承くうの換を

いやハことあたハハ何につきても貧人と富人との堺
ハ云しき遠ひて貧人ハ富人のためは食をまし富人
ハ貧人よりて富をうさぬるハ右ハ高人のみならハ
百姓などのうへてても同じ事又富者若ハ百姓なり
ら多し高をもし金銀のやりくりのうへて利を得
る事ハ高人よりえることなし又農作のうへてても富
者若ハ利を得ること多し取しなとをも丈夫といれ人
手百をも十分うけてつくる取しみのりも殊に取し
く米などを賣おハすも利の多き時を待て賣れハ金銀
を得ること多く貧しき百姓ハすこしの米を賣ても得

ことなりうたき故に急いずれば八尺に尺利を倍るこ
となりうたくしすへて為人の執とすえることなり
とよりくは貪民ハ何に付てもふひんなる若之れ大
女上の金銀財宝ハとろく平等ハ行わたりうたきも
のこて片ゆきの尺るハ古今のつねこてほとよく融通
するやうはなりうたきもその内にも今の世ハ別し
て貧しき若ハまにまに貧しく富る若まにまに富こと
の云しけれハ上より立て治め玉ふ人の所えうらひを以
ていふともして玉富る若の手にあつまるるところの金
銀をよきほどに教してきり貧民を救ひ玉ふやうにあ

らまほしきもの人世しその教しやうハ若の復報
してかうらおんやうにあらてハ木もしろうらにハ
ほと多く蓄へ持たれハとてハこれみな上より玉ハリ
たるともあらん人の物を盗めるともあらんは度より
きたる事をして持たるともあらん皆これ面々の先祖
又ハ已う傷きよて持たる金銀なれハ一錢といへとも
去ひてこれをえへき乃理ハなし金銀ハいふほと海山
に持ても人毎に獲ふやさんとこそ思へいささうよて
おれなくてこれをおん事をハ去慈ふるもの人能れ大
又公より復報たすれハよしなき佛かなとのため

多くの金銀をわしてをしむとなけれハまして貧乏の
貧民を救ひ玉ふ所仁政のためならんハモ振振リ依
て徳分むうら感服してお働き用い立つべき事にて
是ハ宜しき仕方の為へき事と云く云ひてこ
れを百んことハかよらに又モ金銀を他の事用ひ
んもかよらにひたすら貧民を救ハまほしきこと
上より民を救ひ玉ふ所仁政の考行えれて貧民の用
めくみをあつたく存しなる振子を又モ付られん
たのつうら富人ハ救ひの志お來へきことと云てもし
志ありて貧人を救ふ者あらんハその性とはと云
厚

くこれを賞美したまはれおえけみて救ふ者多うら
へし勝れた代玉の振子をあげ玉ハるハ近來民を救
政ハすくなくしてたたひたすら上の用金の銀をの
み云付らるる也又富人ハこれを恐れて志ある者も
救をハせれ又たまたま救ふ者あれとも了れをハ賞
せらるるもなくしてたた上の用立ものきのみ
賞せらるるやうなるハ振子金銀を以て上の用
立て賞美せられ玉ふりのよき者をハせ上りて以て
了ぬみくむこと也又了れを望む者ハすくなし貧民
を救ひて賞せられんハ世の中の人のお悦ぶ事なれハ

そねみよくむおなくしてこれをうらやむもののみ
多うるへしは恥をよく考へて富人の金銀を散して貧
民を賑えんへき仕方あるへき事なさて去も中せ
るぬく富人とてもの金銀の面々の傷きよてねたる
ところなれい志ひてこれをめされんい公よりぬ
之又やむ事をねこれ借り玉ふことありともそれ
も志ひてい公よりぬ但し其内は位長してやた
くくらに君恩をありうたく思ひなりて冥加のため
さし上んことを教ふ若あらんい格別の事なされと
振の金銀も皆貧民に施してなるへきい上の用いハ

用ひ玉えぬやうにこそあらまほしけれ又面々の勝手
のためともなり冥加のためともあれいとしてつね
金銀の用を勤めんと教ふ若あらんいハもし用あ
らハ是ハ許し玉ふへきよやされと上の用をうけ玉
ふるよ付て人よ金銀を貸すもその用のすあよこと
よせて貸しつくる事近世何方よも多しこれまた
富者を富にすよて世の貧民のためよ大なる害なと
ひ上のためよハ其勝手よなる事なりとも下民のため
よ害あらん事ハすへて禁せらるへきよこそさてまた
今の世ハ武家大小よらに仕仕たりといひて町人

勝手をまゝなむにること多しこれハ使直はして自由
ハよきやうなれなつまる所ハ換多し町人ハこれより
りて多くの利をばるそれだけ武家ハ換ある可ハ同日
又元たれども困窮の甚なるときはあたりて使直なるこ
よりて換をハ知なうら皆中付る可之然れともこれハ
又富貴のうけたまはりてする可なれハまにまに富
を重ねさせて武家ハ換あることなれハなるへきた
けハ使直とせまほしき可之
人ハ何事もその身の分際お直ににるうよき之分限
過て泰らわろき可ハハに及たれ又あまり悔して

難くはるも正及ハあらは大名ハ大名お直に牙を
持玉ふよし使直うよきとて下下の武士のぬく牙を
持玉ふへきともあらは次ハ下下はたつ武士も又その
お直お直うよし百姓町人も又その身上お直に牙を持
直一きへすへて可を難くはるうよろしとて又あ
まり牙持るうろしけれハそれハ直して木のつうら
むも万の行ひもいやしく難難しくなりて上はたつ人
なとハ殊ようらぬ可多きもの之又儉弱をむくくれ
ハ木のつうら倍番きうたハ流れやにきものよて必は
すへき可をも止てせは人にとらへきものをも惜み

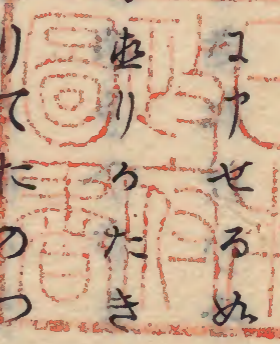
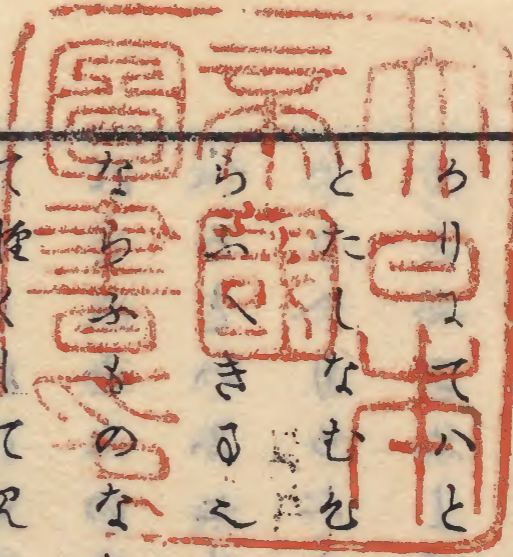
てとらさなむしき若ハ人のものをさへ奪ハまほしく
必ふやうのむこもなりやれし終は必をよくかたて
儉素としてあらも悟番は流れぬやうにはありなく
もの之殊は上はたつ人なとはわきまへなくして悟番
なるときハ下の個ひうハきて去るしうらなされハ
儉約も實は實しき事うあらはとく上中下各身分
おむくくらぬうよき之終りといへともうのおむとい
ふハいりほとりおむなるや身分のなきものなれハよ
きはとハ知りたき事なるを思して善美なるうたは
うつりやぬくすこしも變素なる方へハうつりよくま

ものなれハ治平の久しくつつけるせハ一回は順順
美の長にるならひとして上も中せるぬく今のせほ
と下う下まで善美なることハ右今の事なき事なれ
ハ今のせはこれをも限おむのよきはとならんと必ふ
事ハ皆大に分限は過てある之終れハこれをよきは
とよせんと必ふときハ万事を大よきすてて狂人う
と人う笑えるるほとよ驚さされハ木の木の身分おむ
の和へハ當りうたし終れともさはとまでハとても
たとしうたきものよてたとひ自分一人ハ人ううまハ
は右のぬくよたとしてもお肉までよも終るときりた

く又上よりいふほと罷しく命令を下してもこれを制
せられても時々の勢ハ中中防きうたく人力の及ひら
たきところあるもの之たとひあえらくハ命令を恐れ
てこれを怯しむやうでも未とけうたく又うえへハ
命令をぢやうでも内内にてハ皆これを破る衣被の
制なとみな給之又一ふきりこれを制しても天下一同
ならされハその制まうたきりも多し又熱体表向へハ
おさる家内のこまうなるもの奈のましきを一つ一つ
喰味をとけてこれを禁入へき由をけれハとよりく
は女上一同の華英たこりハいりやうとして依り

停めうたく年年月月と長しゆくえり之給れたもの
ハうきりあてのほりきまる時ハ又木のつらら降る
ことなれハいつそ又本へうへる時若もあへきとさ
れとひせ上の奈りなとの左振は自然と變素の方へう
へるといふことハまつハ何そ変なる可なとのなくて
ハうへりうたきことなれハその變のあて自然とりへ
るを安んじして待居るへきとあらはされハ上とた
つ人ハ徳分なるへきたけハ工夫をめぐらして自然奈
の長せさるやうと少しつつても變素の方へうへる
やうとえうらひふへきとけにしつつても變素の

方より入りて長居ることなけれは起るべき後身は
こらぬして長久の身なるべしさてそのえらひ
いふといふは右の中せぬはは貴しき命令を
りりてはともぬりたきことにてたた面自能
とたしなむむなりてたのつうらするやうと
らふきる之下はとくよきもあしきも上
なりきものなれは先上より物とさるるたけ
て濃くして又せまはぬぬはたのつうら中も下
下の民もそれならひきか減てつひは却て美
なる身を笑ふやうにもなるへきこととすへて何
なり



てもむよく後扱してする身とあらされは末とほり
たく永くハ行えれぬものなりさてその下下をむより
後扱せしむることハ傍上よりのえらひ仕方より
ことそらし

秘本玉くしけ上終

○秘本玉くしけ上

四三終

